「脳の癖」は加齢と共に変化するのか？

汎用課題作成のための予備的研究

○田渕 恵¹・坂田 陽子²・三浦 麻子^{3,4}

(¹中京大学・²愛知淑徳大学・³関西学院大学・⁴大阪大学)

キーワード：心の理論・生涯発達・認知機能

Dose “Habit in processing” change with age?

Megumi TABUCHI¹, Yoko SAKATA² and Asako MIURA³

(¹Chukyo University, ²Aichi Shukutoku University, ³Kwansei Gakuin University, ⁴Osaka University)

Key Words: Theory of Mind, lifespan development, cognitive function

目 的

対人場面で何らかの問題に遭遇したとき、相手の感情の推測によって解決しようとする人もいれば、自己と他者の状況区別による事実の把握によって解決しようとする人もいる。こうした感情・認知的処理は、加齢によってどのように変化するのだろうか。例えば「心の理論」においても感情・認知の2側面があるが、加齢の関連を検討した研究はあまりなく、提出された知見も一貫していない。高齢期には認知機能の低下に伴い「心の理論」の認知面は低下するが感情面は保たれている、つまり感情処理が優位となる、とする研究(e.g. Bottirolia, et al., 2016) もあれば、高齢者は若年者よりもいずれの側面においても低下しているとする研究もある (e.g. Cavallini, et al., 2013)。このように、感情・認知的処理の加齢変化に関する一貫した知見が得られていない原因の一つに、2側面を区別できる汎用指標がないことが挙げられる。本研究では感情・認知的処理の生涯発達の変化を捉えることを目指し、問題解決時にどのような処理が行われたかを判別できる汎用課題を作成することを目的とした。

方 法

対象者：高齢者 20 名(男女各 10 名, 平均年齢 68.40±4.01)を対象とした。**課題**：対人場面における問題解決時の優位な情報処理型を判別できる課題として、「人物が登場する場面の最初と最後のイラスト(2 コマ)を見て、ストーリーを想起する課題」を作成した(Figure1)。課題は 4 種類作成し、そのうち 3 種類は最後の場面のみ登場人物の表情が異なる 2 種類のイラストを作成した。イラストを 2 コマずつ提示しながら、「これは、お話の最初と最後の場面です。2 人に何が起ったと思いますか？自由に考えて、説明してください。」という指示を行い、語りを IC レコーダーで記録した。対人場面の情報から認知的処理を行う場合には、登場人物それぞれの状況説明の語りが行われ、感情的処理を行う場合には、登場人物の表情に着目し、感情やその背景を推測した語りが現れると予測した。語りの前に、対人場面での他者の正しい感情理解を測定する指標として比喩・皮肉テスト(安立ら, 2006), 認知機能の測定として MoCA-J(鈴木・藤原, 2010)を用いた。

Figure1 課題例. 2 コマ目の人物表情が違う 2 種類を用意。

結果と考察

各語りの逐語録を作成した後、語り文字数をカウントしたところ、1 名の文字数(3724)が平均+2SD を超えたため今回の分析には含めなかった。語り文字総数(平均文字数 1139.95±286.86)と比喩・皮肉テスト(比喩・皮肉得点, 8.95±1.27), MoCA-J(25.95±2.04)との関連を調べた。語り文字数と比喩・皮肉テスト($r=.28, p=.24$), MoCA-J($r=.25, p=.31$), MoCA-J と比喩・皮肉テスト($r=-.001, p=.99$)の散布図を Figure2 に示す。散布図より、比喩・皮肉テストと認知機能は無相関であるのに対し、課題の語り量と両側面には正の相関の傾向が見られたが、いずれも統計的に有意ではなかった。語り量が感情理解・認知機能の 2 側面と個別に関連している可能性があるため、さらに語り内容と 2 側面の関連を見ることで課題の妥当性を確認できるかもしれない。今後は、対人場面での感情・認知的処理の優位性、言わば「脳の癖」を判別する課題として、本課題の精度を上げることを目指す。発表では語りの内容分析(感情語数や人物表情が違う 2 種類での語りの違いと、感情理解・認知機能との関連等)の結果も報告する予定である。

Figure2 語り文字数と比喩・皮肉テスト、認知機能との関連。

引用文献

安立ら (2006) 脳と発達, 177-181. Bottirolia, et al. (2016) *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 152-162. Cavallini, et al. (2013) *International journal of aging and human development*, 181-98. 鈴木・藤原(2010) 老年精神医学雑誌, 198-202,